

紹介

# ニート・引きこもりの家族形成

二神 能基

(NPO 法人ニュースタート事務局理事)

## 目次

- I イタリアの「家族をひらく」運動から始まった
- II 若者の就労支援とは孤独なワーキングプアを量産することか？
- III 「就労支援」から「幸せ支援」へ
- IV 仕事中心主義人生の20世紀は終わっている
- V 「仲間・働き・役立ち」の3本柱の人生の幸せ
- VI 21世紀型の新しいキャリアアップ
- VII 21世紀の新しい仕事と結婚へ

## I イタリアの「家族をひらく」運動から始まった

若者の自立支援の問題に、この19年間取り組んできた。1994年に、日本の目標喪失の若者7名を、イタリアのトスカーナの農園に送り込んで、その第1歩が始まった。「イタル・デザイン」の社長だった宮川秀之・マリーザ夫妻が、トリノからトスカーナに移住した第2の人生の場である「ブリケッラ共同農園」である。「家族をひらく」運動でつながった4家族が共同で運営する、葡萄とオリーブの有機農園であり、若者の健全育成支援組織「アベルの会」の場でもあった。

元進学塾経営者の病気が抜けきれぬままの私が、入学試験のような参加者選抜を進めようとして、マリーザ夫人に「面倒くさくないの、やる、意味ない」と一喝されて、説明会で「応募書類を投げて遠くに飛んだ人を参加させます」と宣言した瞬間に、ホッとした空気が会場全体に流れたこ

とを、よく思い出す。

「日本はイタリアより15年遅れている」と宮川氏に言われた言葉の意味を考え続けて20年経ってしまったが、いまだに、私にはその答えは出せていない。ただ、私たちが経団連に呼ばれた時、当時の豊田章一郎会長が「最近の若者問題は、家庭やマスコミに原因があるんじゃないのか？」と言った途端、マリーザ夫人が「日本の会社のお父さんの働かせ方に根本原因がある。経団連の責任は大きい」と迫り、豊田会長も「わかった。このプロジェクトを経団連は応援する」と言い、翌年、豊田会長は、私たちのプロジェクトが進行中のイタリアの現場を訪ねて来たが、日本の働き方は、失われた20年の経済の荒波のなかで、家族を解体する方向に進んでしまった。

若者たちに「イニシアティブを持とう」と呼びかけた、このプロジェクトは、宮川家を中心とするブリケッラ共同農園の4家族に、「アベルの会」の精神科医や心理カウンセラーなどが加わった本格的なプロジェクトとして、7年間実施された。

このプロジェクトの成果は、画期的に大きかったと断言できるが、イタリアで元気になった若者たちを、この日本の社会、家庭に、どうソフトランディングさせられるか、私たちの悪戦苦闘が始まって19年経った。

そして、その19年は、日本の失われた20年に重なっていた。この20年、日本の雇用状況は、終身雇用制の崩壊の進行とともに悪化し、特に若

者の就労に、その悪影響が集積される結果となり、ニート、引きこもりが急増し、若者の結婚率は下がる一方であった。

イタリアの「家族をひらく」運動から学ぼうと、私たちのプロジェクトは出発したが、日本の家族は、20世紀型社会システムの崩壊の危機に面して、残念ながら、既存の家族を守ろうと「家族を閉じる」方向に進み、新しい家族を形成する若者が急速に減少するという現実のなかで迎えた21世紀も、今年で13年目である。

## II 若者の就労支援とは孤独なワーキングプアを量産することか？

この19年間の卒業生の数は1200人を超え、初期の卒業生の年齢が40歳を超え、その平均年齢も33歳になりかけている。そして、その9割は、現在も経済的自立を果たしているが、その平均的生活は、正規雇用が5割で、その年収は約300万円弱、ワンルームマンションの一人暮らし、というところである。

「夜遅く仕事から帰って、コンビニ弁当を食べて、あとネットして寝て、また朝起きて仕事、そんな生活ですけど、なんとか自立しています」、そんな卒業生が多い。卒業生の親からも「お陰様で、なんとか自立して頑張ってくれています」と言われることが多く、私も「良かったですね」と答えるしかなかった。引きこもりの生活から脱して、就労して経済的に自立した生活を送っている若者たちは、それなりに満足した生活を送っているように感じられてはいたが、私の心のなかには、何か忸怩たる部分が残っていた。

そんな日々の末に、5年前には、私は「若者の自立支援、就労支援は、孤立するワーキングプアを作っているだけではないか？」と、若者の自立支援の講演でもつぶやいてしまうことが多くなっていた。

劣悪な労働市場に、ただ若者を送り込むことによって、劣悪な労働環境を補強してしまう、そんな詐欺師の役割を果たしているのではないか、これでは、太平洋戦争末期の泥沼の戦場に、若者を

送り込んで、その多数を戦死させてしまった戦前の愛国婦人会のおばさんたちと、同じことをしているのではないか？

そんな思いが、私の講演のテーマを「自立ってなんだ？」「自立って言うな」というところへ進めていき、若者が働かないという静かなゼネストによる「できちゃった革命」論、そして「怠ける権利」を論じたりするところへ進んでいった。

若者の自立支援、就労支援は、若者を幸せにしているのか？「自立」「就労」という言葉は、若者を脅迫する言葉になっているのではないか？

「就労したい」と相談にきた若者が、当方のキャリアカウンセラーと面談した後、「要するに働いたらいいんでしょ。きっちり働きますよ」と怒ったような捨て台詞を残して出ていくことも少なくない。親から「就労して」とプレッシャーをかけられ、やっと相談に来た。そんな新卒一括採用から外れた若者の最初の就労は、多くが非正規の流動的単純労働の不安定な雇用である。そういう就労からは、職場の理不尽な人間関係に耐え、長時間労働に疲れきる、そんな苦難に耐え続ける世界しか見えていなかったのであろう。60代の父親から「働け」と言われた30代無職の若者が、父親を刺し殺す事件が、よく報道されるが、それは象徴的な氷山の一角の問題であり、多くのパラサイトシングルを抱える家庭が、この「自立」「就労」という言葉の暴力の家庭内冷戦状態を続けていると感じられてならない。

## III 「就労支援」から「幸せ支援」へ

毎年、年賀状に、小さな子供を抱いた卒業生の写真が届き始めたのは、8年くらい前からである。そして、その種の年賀状は、毎年、増える一方で、今年は30通を超えた。

そんな年賀状を私にくれるのは、ニュースタートの卒業生同士の結婚が多いが、どのカップルも、私には予測不能な組み合わせであった。両方もバイト暮らし、女性が年上で収入も上、パラサイトダブル、ニート婚、まさに20世紀的結婚観、結婚の条件からは、生まれない21世紀的な

多様なカップルであった。

小学校の女性教師と結婚した元引こもりのバイト男子は、子どもができると予定通りに専業主夫として子育てを楽しんでいる。彼の結婚報告は「ニューススタートのお陰で、ヒモで生きる覚悟ができました」という「ヒモ婚宣言」であった。私にとって意外であったのは、彼の仲間たちが「彼は男らしい」と表現したことである。たしかに、彼の奥さんは「彼の男らしさが心強くて、先生を続けられています」と言っていた。

自分が育った家庭で、強圧的な企業戦士の父親を嫌悪していた女性は、元引きこもりの若者と結婚した。「彼は、家族を大切に、子供とよく遊んでくれるから、毎日がとても楽しいです」と言い、彼は「今の生活を守りたい」と、郵便局の正社員への誘いを断り続けている。彼女は、仕事に人生を盗まれない男を、人生の相棒に選んだ。

いままで、仕事が続かなかった若者が、子供ができてから、仕事が続くようになり、管理職に登用されるようになって、「仕事も悪くないですよ」と言っているケースも多い。もちろん、すべてうまく行っているわけではない。別れたケースもある。二人ともバイトで一緒に住んで3年、30歳を超えて子どもが欲しくなってきた彼女が「結婚しよう」といった途端に、彼が出ていってしまったというのである。彼を呼んで聞いてみた。「彼女が嫌いになったの?」「いいえ。ただ僕は、結婚は正社員みたいでイヤなんです」

彼は大学卒業後、正社員で3年働いたが、過労で鬱になり、3年引きこもった後に、当方に来て、またバイトできるようになり、その同棲生活に満足していたのであろう。過労の鬱を体験した若者には、正社員も結婚も重く感じすぎる面があるようだ。

この二人は、別離の傷は深くないようで、私は、先日、新たに彼女を結婚願望の強い男と見合させた。うまく行きそうである。

幸せそうな家族写真が増えてくることは、私の正月の楽しみになっている。3年前には、そういう子育て中の卒業生たちが20組近く集まるパーティーに呼ばれ、賑やかな幼児たちに囲まれて、

「おう、これはニューススタートの孫たちや」と興奮して叫んでしまい、参加者たちから爆笑と拍手を受けて、思わず涙を流してしまった。

一人の卒業生のお母さんからは「なんとか引きこもりを脱して自立してほしいとニューススタートをお願いしたのですが、まさか孫を抱けるようになるなんて、夢にも思いませんでした。孫を抱いたとき、そんなことを思い出して、涙が止まりませんでした。先生、本当にありがとうございました」という便りが届いた。私は、自分がやってきた若者の自立支援の意味を、再び、肯定的に考えられるようになった。

私の講演のテーマは、「孫を抱ける自立支援」に一挙に飛んだ。「働け」と迫るのではなく、「孫を抱かせて」とお願いする自立支援こそ、21世紀の自立支援であると訴え始めた。最近生まれている子供の数は、毎年100万人をなんとか超える程度的人数で、多数のニート、引きこもりを生んだ団塊ジュニア世代の半数である。団塊世代が年金世代へ突入する時を迎えて、今、社会に出ようとしている20歳の若者も120万人で、現在の若者たちや子供たちを待ち受けているのは、求人難の時代であり、現代の若者も子供たちも、みんな金の卵である。もはや「働け」と迫る時代は終わりにかけており、「助けて」と、子ども、若者にお願いする時代に入っているのです。

私は「ニューススタートの支援は就労支援ではなく、幸せ支援に広げなくてはならない。私たちが、若者たちから引き出すべきは、仕事力だけではなく、仕事力と結婚力である」と宣言した。

たちまち、女性スタッフから強い反発が出た。「結婚が幸福なんでしょうか？ 女の幸せは結婚だみたいな考え方には、私は賛成できません」。

私は、うろたえながらも必死に説明した。「あなたが反発しているのは、20世紀型の結婚です。私たちの結婚は、食っていくことが大変な時代であったために、どうしても経済主義の結婚が多かったと思います。しかし、最近のうちの卒業生たちの結婚を見ると、私たちの時代の結婚とは全く違う結婚の形を作りつつあるような気がするのです。ニューススタートが応援したいのは、21

世紀型の新しい結婚、人間と人間の結婚、経済主義の結婚から人間主義の結婚へ、まさに結婚のルネッサンスなのです」

その宣言は、約3年前である。宣言直後は、たかだか「結婚力」という言葉が入っただけという感じだったが、その後、少しずつ私の結婚ルネッサンスという考え方への理解が浸透していることを実感している。当方の鍋会での話題が、就労問題だけから、就労と結婚の問題へと多様に広がっており、鍋会の空気が一段と明るくなってきた。「就労したい」と当方に来た若者たちの「幸せになりたい、結婚もしたい」という本音が普通に出せるようになってきたのだと感じている。若者たちは家の中でうっかり「結婚したい」とでも言おうものなら、「それなら、まず、働け」と「男は仕事、女は家庭」の父親から就労を迫られるだけなので、とりあえず、親とのコミュニケーションでは「就労したい」としか言えない立場に追い詰められていたのであろう。人間としての本音が語れる、それこそイニシアティブであり、若者にとってのルネッサンスである。

#### IV 仕事中心主義人生の20世紀は終わっている

大学を中退して、20代の10年間を引きこもっていた30歳の若者が入寮してきた。入寮して3か月経って、鍋会の雰囲気慣れて来た頃、彼に聞いてみた。

「ひきこもっていた10年間、何が不安だったの?」。彼はニヤリとして答えてくれた。「老後ですよ」。オイオイ、青春を老後の心配で過ごしてきたのかよと、私は苦笑しながら、いろいろ話してみたが、何かうまく話がかみ合わない。

20世紀型人間の私は、老後の不安という経済的なことに直結して考えてしまう。確かに、彼が60歳になった時、多分パラサイトできる親は亡くなっているだろうし、働いていない彼は無収入だし、経済的に不安だろう、そんなふうを考えて語りかけてみるのだが、彼の反応はおざなりで「その時は、親の後を追うか、生活保護でももら

うんですかねえ」と、まるで他人事の返事なのだ。

私は「お前さんの老後の不安で、何なの?」と、再び問いかけた。彼は、すかさず「老後の孤独ですよ」と答え、「このまま老後を迎えて、誰とも話をしないで、ネットで社会とつながるだけの生活に耐えられるか、そんな事を考え始めると、不安が押しよせてきて、眠れなかったですよ」と、彼は語ってくれた。

彼がニュースタートにきた目的は、建前的には「就労」であるが、本音は「老後の孤独」の問題であった。私は、この彼との会話で、今まで理解できていなかった若者たちの就労の壁の問題の大半が理解できたように感じた。

3年前にニュースタートの若者支援は「就労支援」から「幸せ支援」へと広げなければならないと宣言したものの、その考え方はまだスローガンので具体性に欠けていたが、「幸せ支援」の具体的な方向が見えてきたのである。

「就労支援」は「男は仕事、女は家庭」の仕事中心の人生だった20世紀高度経済成長時代の考え方の延長上にあるが、成熟経済の時代に入った21世紀では、仕事の実りは公私ともに少なくならざるをえず、社会構造的には「仕事がつまらない時代」に入ったのであろう。仕事生きがいになりにくい時代になってしまったのである。

イタリアプロジェクトの流れを引き継いで、当方は、ローマ大学日本語学科の留学生の受入れを続けているが、彼らに聞いたことがある。「家庭を顧みないで仕事に打ち込むお父さんを、イタリアでは、どう見ているの?」「えっ」という表情の彼らの答えは一様に「イタリアにはそんな変な人は居ません」であった。

戦後日本の高度経済成長を担った仕事中毒のお父さんは、人間的には変な人だったのかもしれない。当方にくる若者の父親は、そういう仕事を頑張った人が多いが、その息子たちは「お父さんは頑張った人生だと思うが、僕はあんな生き方をしたいとは思わない」と父親に否定的な子が圧倒的に多い。20世紀後半の、家庭を奥さんに任せっ放しの仕事中毒の父親像は、あの時代の日本が生み出した特殊な奇形の父親像であったのかもしれない

ない。マリーザ夫人が、経団連に「日本のお父さんの働かせ方が、日本の家庭問題の根本原因である」と迫ったことを思い出してしまう。

## V 「仲間・働き・役立ち」の3本柱の人生の幸せ

それでは、21世紀を生きる若者たちの「幸せ支援」とは何か？

就労のなかに幸せが見つげにくかった当方の若者たちが、その日常活動のなかで作りに上げてきたのが、「仲間・働き・役立ち」の3本柱の人生の幸せである。幸せへの入り口を就労だけから、この3つの入り口に広げたのである。

就労の自立を果たしてからも、ニュースタートの希望長屋（シェアハウス）などに住んでいる若者が400人いる。それは、「仲間」の問題であり、彼らの自立には「仲間」が必要である。彼らは共同生活の中で、自立とは、孤立して誰からの助けも求めない生き方ではないと学んだようである。当方の卒業生と寮生たちは、一昨年（2010）の3・11以来、東北へのボランティア活動を続けている。私も、10年くらい前から、現代の若者たちの「役立ちたい願望」の強さを感じていたが、内閣府が2008年に実施した『国民性調査』を見て、その確信を深めた。「自分のために生きるよりも、他人に役立つ人生を送りたい」を選んだ若者が、20代で43%、30代で52%だったのだ。自己実現よりも、役立ちの人生を選ぶ若者が半数を超えている。他人を押しつけてでも、自分が勝つ、そんな下品な生き方を拒否する若者が増えているのである。そして、その東北へのボランティア活動で知りあい、結婚した若者も出てきている。ボランティア活動の副産物は大きい。

生きる喜び、生きがい、自分のアイデンティティの確認、そんなものは「仲間」「役立ち」の中で感じたらいいではないか、そんな時代を迎えているのであろう。ワークライフバランスが語られることが増えているが、そんな時代を反映していると思われる。

そう言えば、昨年の勤労感謝の日に、神戸勤労

会館で、関西の若者たちに呼ばれた集会のテーマは「勤労感謝の日をぶっつぶせ、若者集会」であった。20世紀後半の日本は、勤労の価値の過大評価の時代であり、現代の日本人の病気は、成長なき経済のなかでの働かされすぎ、働きすぎなのであろう。

しかし、自分が食べ、電気も消費する以上、「働き」も必要ではある。「仕事は人生の3割程度に過ぎないが、いちばんイヤでない仕事で、食い扶持だけは稼ごう」と、仕事の価値を低減し、仕事中心主義の脅迫から解放した。

この3本柱の幸せ人生の考え方は、一挙に就労率を引き上げ、若者たちの幸せへの展望を広げたようである。そして、この3本の幸せの柱は、それぞれ別々に立つものではなく、その3本の柱が多様に重なり合い、その相乗効果を大きくして行くものである。

私は「仲間」に、結婚も含んでいる。結婚は「役立ち」あう場でもあり、「働き」を支える場にもなるものなのである。

就労支援だけでは、若者に希望を感じさせられなかった限界を、「仲間・働き・役立ち」の3本柱の人生支援へと視野を拡大することによって、若者たちは「いちばんイヤでない仕事」をまず入り口の就労体験として受け入れ、就労支援が進み始めたのである。

## VI 21世紀型の新しいキャリアアップ

「いちばんイヤでない仕事」から「働き」始めた若者の仕事の継続力は高い。もともと、仕事に期待を持っていないのだから、職場に対する不満はたまりにくい。そのうえに、仕事の不満を話し合える『仲間』がいて、「そんな上司はどこにもいるよ。うちの上司なんてもっとひどいよ」とか、「それなら、うちに来いよ、今、募集中だよ」とか、転職情報の提供にもつながっている。そして、「仲間」が、結婚の道をも開いている。「仲間」同志、「仲間」の友人、「仲間」は次々と広がるのである。出会い、つながりが、結婚のチャンスを広げるのである。

最初は、流動的単純労働から始まるが、そうい

う単純労働もある期間きちんと続けると、総合的な仕事力は向上していて、正社員面接に合格し始める。「いちばんイヤでない仕事」を非正規として3年「働き」続けるうちに正社員、そんなキャリアアップの道がここ数年確実に広がってきている。まず、「仲間・働き・役立ち」の広い視野で、そういう着実なコースを進んでいる先輩を仲間としてみていること、そして、忍びよる「人手不足の時代」が、首都圏では始まりかけていることが大きいと思われる。

最近、急速に増えているのが、彼らの管理職就任と結婚である。元ニート、ひきこもりの若者はずっともと上昇志向が低い。そんな彼らが次々と、いろいろな職場で昇進している。ひたすら頑張り主義の団塊の世代の管理職の大量退職の時代を迎えて、「どういう訳か、責任者にされてしまいました」などと戸惑っている彼らの話を聞いていると、彼らが持っているマイナスイオンが、経済成長無き時代になって、彼らを否応なく管理職に押し上げているようである。成長時代の行け行けドンドンのマネジメントの時代が終わり、成熟の時代には、マイナスイオンのマネジメントが求められ始めたのかもしれない。

そして、そんな先輩たちの結婚も、どこかマイナスイオンの結婚を感じさせて、後続する若者たちの結婚力、仕事力の向上を静かに引き出している。現実的には、結婚力、仕事力は、別々のものではなく、もともと背中合わせにくっついていたものなのであろう。昇進が先か、結婚が先か、どちらかと言えば、そのほとんどが結婚が先である。結婚は仕事力を倍増させる。成長時代の元企業戦士のキャリアカウンセラーの相談員を、若者たちが避けたがったが、おじさんたちの仕事中心主義で自信満々の上昇志向の体質が、もはや時代遅れと、若者には鬱陶しかったのだらうと思われる。

21世紀の成熟経済の時代のキャリアアップは、仕事の世界だけでなく、「仲間・働き・役立ち」の3つの世界の時間差両立的で立体的な構造をマイナスイオンで考える方が現実的である。

## VII 21世紀の新しい仕事と結婚へ

私は、1年前に「これからは婚活に取り組む」と宣言したものの、まだ、どこか婚活という言葉が、頑丈な壁の前で空転している感じが否めず、最近、やっと気づいた。

婚活の前には、婚哲、婚育が必要なのだ。そして、それは「婚哲、婚育、婚活」の順に進めなくてはならない。婚哲とは結婚の哲学であり、婚育とは結婚能力の育成である。そして、現時点での結婚率向上の最大の壁は婚哲である。

1年前に私は「婚活親父の会」を呼びかけたが、集まりがよくなかった。何人かの親父に電話してみたが、「うちの子の問題は自立で、自立もできてない子に婚活は無理です」とか「息子に聞いて見ましたが、本人は結婚する気がないようですから」とかの反応が大半であった。その親父たちの反応から、婚活の前に、何よりもまず婚哲が必要なのだと思知らされた。

結婚という言葉から、まず何を思い浮かべるか？ まだまだ、日本の親たちは、高度経済成長時代の、高収入、高学歴、高身長「三高」を求めた結婚観から、基本的には変わっていないことを痛感させられている。親が走り回る子供のための婚活パーティーなどを見ていると、「三高」を振り回して空転している親が目立つようだ。そして、もっと問題なのは、21世紀を生きる若者たちも、そう思わされていることである。親の20世紀的な結婚観が、ニート、引きこもりの若者の結婚を諦めさせている。20代の若者の9割以上が結婚を望んでいながら、30代で結婚をあきらめかけている。そんな若者を支援しないで、日本の未来はあるのだろうか？

20世紀の結婚は、基本的には「経済単位としての家族」形成を目的とするものであったように思う。貧困からの脱出を目指す経済成長が国家目標であった時代では、ある程度それも仕方無かったと思う。しかし、最近の当方の若者たちの結婚ラッシュは、成熟経済の時代を迎えて、日本人の結婚観が構造的な変革期を迎えているように感じさせる。彼らの結婚は、経済主義的でなく、普通

に人間的なものであり、「経済単位としての家族」形成ではなく、「共生の単位としての家族」というイメージに近い。「仲間・働き・役立ち」の3本柱の人生の幸せを求める共生単位としての家族形成なのであろう。

平均年齢33歳の卒業生の結婚率は、最近、急速に上昇し始めたが、現在は、女性は4割超え、男性は2割足らずである。しかし、年齢的にもこれから急速に結婚率は上がってゆき、3年後には女性は6割、男性は4割、10年後には全体の9割超えを期待している。それは、何よりも、若者たちが「結婚したい」と考え始めていることが大きい。彼らは、20世紀型の婚誓の壁を超え始めたのだ。当事務局も、結婚相談所との提携など、結婚率の向上を、「仲間・働き・役立ち」の3本柱の幸せ支援路線のなかで、重点目標として認識し、ありとあらゆる手を打ってゆく計画である。

これからの若者支援は、就労支援だけではなく、現実的に「仕事力」と「結婚力」の両輪を構造的に引き出す支援でなければならない。

そして、その支援は、就労、結婚の21世紀型の何でもあり的な多様化を進める「家族をひらく」方向で考えなければならない。20世紀の仕事中心の考え方から、21世紀の「仲間・働き・役立ち」の3本柱の人生の幸せの方向へ転換していくために、まず働かせすぎ、働きすぎの仕事中心主義の根底の問題解決をベースに考えていきたい。正規、非正規の格差問題とか、所得の向上とか、そういう20世紀型の考え方から、21世紀型に向かう考え方へ、問題意識を哲学的に転換していきたい。若者たちは、「21世紀は、みんなでピンボーを楽しむ世紀ですよ」などとつぶやき始めている。確かに、長いデフレの時代に、ピンボーを楽しむインフラは整ってきている。そして、彼らは物欲も競争心も低く、その人口も減り続けている。

結婚も、根本的に21世紀型の弾力的な結婚制度を考えないと、若者たちには、現在の結婚制度は、窮屈で複雑なハードルに見えすぎている。最

近、当方の若者たちの口にのぼるのは「結婚の民営化」という根源的な改革を求める言葉である。

20世紀型の硬直した仕事、結婚の構造が「勝ち組」「負け組」の格差を固定し、「結婚は正社員みたいでイヤなんです」と言う若者を生んでいる現在、私たちは21世紀型の新しい仕事、結婚制度の創造に取りくまなければなるまい。人手不足の時代に直面した現在は、現行の仕事、結婚制度を根源的に改革するチャンスである。

『仲間・働き・役立ち』の3本柱の人生の幸せは、どこか20世紀型の社会システムの崩壊を予見した、日本の若者の進化論的適応のような感じさえている。経済成長時代の大量生産、大量消費の空しさを見て、若者たちに「生産拒否症候群」「消費拒否症候群」が生まれたように、私たちの20世紀型の仕事と結婚の形骸化を感じた若者たちに「仕事拒否症候群」「結婚拒否症候群」が生まれていることを、人間としての進化として、私たちは前向きに認め、21世紀型の新しい仕事、結婚の形の創造を支援したい。

そんな彼らが作る21世紀の日本は、みんなが少しずつ貧しくなりあうことで、「人間と環境に優しい社会」であろうと感じている。それは、20世紀型の仕事と結婚では解決不可能と思われる世代間格差の問題を、静かに21世紀の日本にソフトランディングさせようとする若者たちの、親世代を「助ける」優しい知恵のような気がしている。

そういう意味では、日本の若者たちは、エコノミックアニマルから人間へと進化しつつあり、やっといタリアに追いつき、そして追い越し始めているのかもしれない。21世紀の私たちの老後は、孫たちに囲まれて、心豊かな清貧の生活を楽しめそうである。孫を抱けるなら、ジジババは、年金減や医療費負担増を喜んで受け入れるだろう。

ふたがみ・のうき NPO法人ニュースタート事務局理事。  
最近の主な著作に『ニートがひらく幸福社会ニッポン——  
「進化系人類」が働き方・生き方を変える』（明石書店、2012年）。